令和６年度第３回三重県ひきこもり支援推進委員会　委員発言概要

日　時：令和６年 11 月 12 日（火）13 時 30 分～15 時 30 分
場　所：三重県勤労者福祉会館　第２教室
出席者：別添出席者名簿のとおり

（１）「第二期三重県ひきこもり支援推進計画」中間案について
　資料１に基づき、小松地域共生社会推進監から説明後、意見交換

【斎藤委員】
・当事者の感想として「つながりと信頼関係」が大事であることが分かったのは非常に大きい。
・当事者との信頼関係の構築を強調した支援体制を組んでいただければと思う。
・家族会への定期的な参加は家族支援において非常に有効。
・当事者支援においてデイケアや居場所はエンパワーメントとして非常に有効。当事者が初めて家族以外の他者と親密な関係を経験できるためこの部分の強化を提案したい。
・社会参加に関して、目標は「自律」であり経済的に自立する事ではない。「自律」を目標にすると結果的に社会参加につながる。自律を共にめざす伴走型支援が望ましい。

【野村委員】
・ひきこもりになったきっかけは不登校やいじめなどの人間関係の要因を引きずっていることが分かった。
・支援機関へのヒアリング先に教育機関は入っているか。もし入っていなければ、今後機会があればスクールソーシャルワーカーにもヒアリングしてもらいたい。
・人事異動もあって長期的に関わるのは難しいと思うが、小・中・高の卒業するタイミングなどで関われるとよい。

【小松地域共生社会推進監】
・教育機関に直接ヒアリングは行っていない。ご指摘のとおり、別の機会に意見を聞いていきたい。

【平井委員】
・ひきこもりに対して、社会全体の理解が不十分であるとの主張がある。これは社会全体だけではなく、家族の中にもあって、祖父母や親から批判されたという話はよく聞く。
・社会全体の理解を深めていくことで、結果的に家族支援につながると思う。

【小松地域共生社会推進監】
・家族に対するひきこもりへの理解を促すためには、社会全体の理解を上げ、意識を上げていくしかないと思うので、そのような表現ができないか検討する。

【伊藤委員】
・「大きな社会問題」、「深刻な課題」という表現は、ひきこもりが問題であると言われているような気がするので控えた方がよい。
・ ＤＸの推進により「さまざまな課題が解消され」とあるが現段階ではＤＸがさまざまな課題を解決するまでには至っていない思う。
・「民間事業者等への働きかけを行う」とあるがどのような事業者を想定しているのか。期待する役割は何か。
・「中間的・過渡期的な集団との再会段階から、社会参加の段階に向けて」という表現は一般県民に理解できるか疑問がある。
・この計画においては「就職氷河期世代」と限定しない方がよい。
・「外ごもり」という言葉は一般用語ではないように思う。
・支援者支援のところで、最初の部分は支援を行う目的だと思う。県の後方支援は市町のスキルアップやノウハウ不足を補う支援だと思うので、この最初の部分を少し修正してはどうか。

【小松地域共生社会推進監】
・民間事業者等への働きかけについて、行政だけではなくＮＰＯ法人や民間団体も巻き込んで一緒に取り組んでいこうという趣旨である。少し伝わりにくいように思うので工夫したい。

【浦田委員】
・アンケートの結果から、長期の支援につなげるためにも信頼関係の構築が大事であることがよく分かった。
・予防的な観点、関係機関との連携についてもう少し充実できるとよい。
・サポステは建前上ひきこもり当事者の支援ではないところがあるので「経験者」を入れるか「社会的自立に課題を持たれている人」など表現を検討して欲しい。
・「就職氷河期世代」を入れるのであればサポステとマイチャレも関わるので整理してほしい。
・早く適切な相談先につなげるためにも学校との連携は大事。
・不登校の支援をしている団体、塾なども含めてつながりを持つ必要がある。

【平井委員】
・ひきこもりになる背景に社会的経験の少なさや活動機会の少なさがある。多様な経験や活動機会を保障していくことが大事。

・多様な経験を積み重ねることによって、人とつながり応援者を得ることができる。このような視点を盛り込めないか。
・大企業を中心に雑談ができる環境があるとよい。ゆとりのある社会になることが結果的に予防につながる。
・継続的に関わり続ける窓口を作ることが必要。専門職による伴走型支援を続けることが家族や当事者にとってもよいと思う。このような窓口は何か所ぐらいを想定しているか。理想としては、県の保健所圏域ぐらいにあるとよい。

【小松地域共生社会推進監】
・ピアサポートセンターはまず１か所から。徐々に広げていけるとよいと思っている。

【野村委員】
・不登校の子どもに対して、その子の「宝物」を見つけてあげる。認められる経験を積み重ねていくことが予防につながる。

【堀部委員】
・予防的なところだが圧倒的に学校の先生が少ない。ひきこもりや不登校が起こる背景に先生の不足や余裕のなさ、友達同士のコミュニケーション不足がある。
・先生は詰め込み式の教育をするだけ、子ども達は友達同士の関わりや人間関係を作ることができていない。学校教育というところをもう少し議論していく必要があると思う。
・企業は生産性向上ばかり進めようとするが、信頼関係を構築したうえで働くことが一番よいはずである。こういう視点が欠けているので、企業を交えた話し合いの場を作る必要があるのではないか。

【小松地域共生社会推進監】
・「予防」というのは、よくないものに対してどう防いでいくかということになるため、「予防的な観点」は非常に難しいテーマである。当事者が見た時の印象に配慮し、うまく表現できるよう工夫したい。

【山本委員】
・相談窓口を作っても田舎だと近所の目が気になり、相談できないことがある。
・行政には相談しないが、民生委員・児童委員は相談される。民生委員・児童委員を支援の中に入れていくことも検討した方がよい。
・学校とのつながりは重要。ひきこもりになる前、不登校の段階における取組の方向性を決めていかないとひきこもりにつながる例がたくさんある。最終案に向けて検討をお願いしたい。

【平井委員】
・民生委員・児童委員から適切な窓口へつなぐ流れが整備されるとよい。
・既存の地域の多様な窓口と、民生委員ともつながりながら、なおかつこれから作ろうとする窓口もあわせて重層的な体制ができるとよい。

【長友委員長】
・実質的な支援の流れを分かりやすく可視化していくことが大事。

【倉田委員】
・行政は一旦事業の枠組みができると民間に委託するケースが多い。行政と民間との間で相談窓口がはっきりせず、どこへも相談できないことがある。
・小さなネットワークでの対応が必要。地域包括支援センターなど既存のものに相談機能を付与していかないと情報を吸い上げられない。
・包括的・網羅的な計画は、裏を返せばどこに注力するかが分かりにくい。優先順位をつける方がこのような計画はうまく進められるのではないか。

【小松地域共生社会推進監】
・ひきこもりの相談は、いろんな機関が連携して総合的に関わる必要があるため、一つの相談窓口で完結することは困難と考える。
・どこに注力するか、表現方法を含め最終案に向けて検討したい。ただし、どの取組も重要であるため、はっきり濃淡をつけることも難しいと考えている。

【楠本ひきこもり地域支援センター所長】
・ひきこもり支援を通じて私たちの生きる社会について考えざるを得ない。ひきこもりが起こる背景の社会は簡単には変わらないという現実がある。ひきこもり支援をとおして自分たちに問いかけ、できることは何か考えていきたい。

【平井委員】
・ひきこもりは何か制度ができれば解決する訳ではなく、また制度を紹介して終わりでもない。当事者や家族に寄り添い続けることが大事で、それが委員会の原点だと思うので今回の計画に何か書けないか。
・制度に当てはめるだけなら行政マンでもできる。そうではなく、本当に求める支援を一緒に考えていくためにも社会福祉士などの専門職が必要。
・地域の分断が進んでいると感じる。今の時代に合ったコミュニティが必要で、ひきこもり状態の人とつながれるコミュニティがあってもいい。企業やＮＰＯ法人などいろんな人たちが少しずつ関わって新たに構築できるとよい。

【堀部委員】
・子どものことで母親から連絡を受けるが、相談につながらない事例がある。

・原因として、父親の発想・考え方があり、子どものひきこもり状態を受け入れていない。父親の考え方を変えない限りつながり続けることは難しく、父親の発想が苦しみの元凶にあり、不安を生む原因にもなっている。
・父親に理解できるメッセージを届けない限り支援が広がらないと思っている。アンケートでも母親がたくさん答えていて、母親は困って相談してくるが父親との板挟みになって結局相談が途切れてしまう。